

○副議長（福島直子君）次に、伊藤くみこ君。

〔伊藤くみこ君登壇、拍手〕

○伊藤くみこ君 日本維新の会、伊藤くみこです。

冒頭に能登半島地震で犠牲になられた方の御冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願うばかりです。また、被災地に赴いてくださった本市職員の方々には感謝のお気持ちを伝えたいと思います。

質問に入らせていただきます。

最初に、防災の新たな取組について伺います。

災害時に断水した場合、手洗い、トイレの掃除、洗濯などができず衛生環境が悪化してしまい、感染症などの懸念もあります。生活をする上では水は欠かせないもので、災害時に生活用水をどう確保するかはとても大事なことです。昨年、私が視察に伺いました岩手県の企業は、東日本大震災で命に向き合った経験から、災害時に必要と感じた様々な製品開発や自治体との連携などの防災対策に取り組まれています。最新の水処理技術で使用した水の98%以上の再利用ができ、その水をろ過して繰り返し循環させて使用できる手洗いスタンドには、スマートフォンを紫外線で99.9%除菌できる装置もついています。平時は役所の赤ちゃんのおむつ替えスペースなどで使用しているそうです。同じ水循環システムを使用したテント型のシャワーは車に載せてどこにでも運ぶことができ、平時はスポーツ大会などのイベントに使用しているそうです。災害時には自衛隊が男女別の入浴施設を開設していただきますが、夫婦間で入浴介助が必要な場合や性別が違う親子で子供を1人でお風呂に行かせることに不安がある場合など利用できない方がいらっしゃるため、プライバシーを守れるシャワーが必要との思いから開発したそうです。この企業は能登半島地震でもシャワーを車に載せ、すぐ被災地に駆けつけ、ニュースなどでもシャワー利用の様子が報道されていました。被災地では病院などからも利用の要請があったそうです。このような機材を平時から区役所等に配備しておけば、いざというときに必要な場所に運び、手を洗ったり、シャワーの環境を整えられます。

そこで、水を高い効率でろ過して繰り返し循環させて使用できる手洗いスタンドやシャワーなどの機器を各区に配備すべきと考えますが、市長の見解を伺います。

東日本大震災の際は、電気自動車は使えなくなり、ガソリンスタンドには長蛇の列ができました。先ほど紹介した企業では、燃料調達が困難な災害時に長い距離を無給油で移動できるようにガス、ガソリン、電気という3種類のエネルギーで給油なしで3000キロ走行できる車両を開発しました。トレーラーを牽引した実証走行では、岩手-名古屋間の1800キロを給油なしで走行したそうです。災害時は停電の可能性があります。このような車を公用車として各区で持っていれば、停電時でも車が使え、災害対策や先ほど紹介した水循環型シャワーを運び、利用していただくこともできます。当然ながら電気自動車を増やすことは大切

だと思っておりますが、災害時に活用できる車両を持つことも必要と考えます。

そこで、災害時に備え、電気以外のエネルギーで動く車両を各区で保有すべきと考えますが、市長の見解を伺います。

地震はいつ起こるか分かりません。いざというときに市民を守ることができるよう、必要な備えをお願いいたします。

次に、広域応援防災拠点について伺います。岩手県遠野市は、当時の市長が東日本大震災の4年前から震災が起きた場合沿岸部の被害が大きいと想定し、内陸部の結節点である遠野市が担う役割は後方支援であると考え、ヘリポートとしても使用できる遠野運動公園を拠点とし災害時に応援部隊が集結することを想定した整備を進め、この構想を市長が自ら国へ提案し関係機関80か所に要望提案活動を行い、遠野市民にも丁寧な説明を繰り返したそうです。東日本大震災の際は、津波の被害を受けた沿岸被災地への応援部隊派遣や物資輸送の後方支援拠点の役割を果たしたとのこと。私は後方支援拠点の必要性を感じ、視察に伺いました。東日本大震災のときは遠野市も震度5強を観測し、多くの被害が発生し、市役所中央館は全壊という状況の中、直後に運動公園の拠点開設と救援部隊受入れの準備を指示し、同時に、市職員、行政区長、消防団、民生委員などが遠野市民の安否確認と被害状況の確認を行ったそうです。夕刻には岩手県警機動隊が遠野運動公園に到着し、その後、全国から集結する救援部隊を受け入れ、被災地への支援を行ったとのこと。また、市職員と市民が一体となり、中高生も自ら自発的に炊き出しに参加し、支援活動を行ったそうです。市役所が全壊し駐車場のテントの中での災害対策本部、テントの中での議会開催、被災状況の様々な記録を御説明していただき、実際の御経験は私の想像を絶するものであろうと思い、胸が詰まる思いでした。市長の強いリーダーシップと後方支援拠点の重要性と平時に何をしていたかがどれだけ大切であるかを学ばせていただき、先見の明が活かされた事例として非常に感服いたしました。本市でも必要性を感じる中、GREEN×EXPO 2027後に旧上瀬谷通信施設地区に運動場や防災機能を有する公園等広域応援活動拠点機能が整備される予定となっております。

そこで、この地区に広域応援活動拠点機能を整備する意義について市長の見解を伺います。

同じく遠野市では後方支援拠点に自治体、消防、警察、自衛隊、医療などの関係機関が集結し、参加人数1万8000人、車両2300台、航空機43機の大規模訓練を実施しており、発災時にはまさに訓練が活かされ、支援活動につながったとのこと。本市においても救援活動の経験があり、日頃から人命に向き合ってきている消防局の方々を中心に、遠野市のような事例を参考にし、しっかりとした大規模訓練の青写真を描いていただきたいと思います。公園の完成はまだ先ですが、関係機関への交渉なども含め、いつ起きるか分からない災害に備え、今から様々な計画や対策を立てることが必要と考えます。

そこで、広域応援活動拠点として機能するためには平時から他機関と連携した大規模な訓練を行っていくべきと考えますが、市長の見解を伺います。

大規模災害時には市民の命を守る広域防災拠点として消防施設をはじめとした必要な施設整備も着実に進めていただくとともに、日頃からのオペレーションの確認等も併せて進めていただくことをお願いし、次の質問に移ります。

次に、のげやまインクルーシブ構想の中ののげやま子ども図書館について伺います。

のげやまインクルーシブ構想は、各施設が連携して誰もが分け隔てなく、学び、楽しみ、安らげるインクルーシブなまちづくりを進めることとしています。野毛山動物園・公園のリニューアルや障害児者支援拠点の新規整備、中央図書館は1階をのげやま子ども図書館としてリニューアルすることとなっています。子ども図書館は子供に本との出会いを届けるという大切な使命と併せて、安心して遊び、絵本を読める環境をつくり、さらに絵本で見た動物を動物園で探すなど、図書館と動物園が連携し、障害の有無にかかわらず、学び、遊べる場所となります。私はそのような図書館ができることは大変喜ばしく、大きな期待を感じているところです。

そこで、のげやま子ども図書館の整備に当たっての意気込みについて市長に伺います。

今回の構想はインクルーシブなまちづくりの一環として子ども図書館を整備する事業です。障害児者支援拠点との連携においては、車椅子やストレッチャーでの来館や館内での移動などを想定して中央図書館のバリアフリー機能を向上させる必要があります。また、1階全体を子どもフロアにするため、現在1階にある一般書をどこに配置するか等の課題もあり、図書館整備には多くの課題解決が必要であると考えます。

そこで、整備の課題にどのように対応していくのか、教育長に伺います。

今回のインクルーシブなまちづくりから子ども図書館が生まれていくように、まちづくりを行う上での図書館の在り方を考えることは大切なテーマであると考えます。野毛山のまちづくりの中で図書館のニーズを考えていく経験を生かし、今後もまちづくりの視点から図書館の数を増やしてほしいという図書館に関して一番多い市民の御意見にどのようにお応えしていくかという点にも目を向けていただくことを要望して、次の質問に移ります。

次に、がん検診について伺います。

令和6年度の市政運営の基本方針で、市長は子宮頸がんの検査方法にHPV検査単独法を新たに導入すると表明されました。子宮頸がんはHPV、いわゆるヒトパピローマウイルスの感染が関連しており、感染しても多くの場合は自然に排除されますが、一部の方に感染が続く場合があり、数年から数十年かけてがんになる可能性があります。現在の細胞診はがんの疑いのあるなしを調べる検査法ですが、HPV検査はHPV感染の有無を調べる検査です。がんへの進行には時間がかかるので、陰性の場合にはHPV検査受診は5年後となります。陽性の場合にはHPV感染のみか、がんの疑いがあるかを判定するトリアージ検査が必要

です。HPV検査で保存した液状化検体で細胞診を行い、異常があった場合は精密検査が必要です。HPV陽性、細胞診で異常なしの場合は子宮頸がん有病者になるリスクがあるため、1年後にHPV検査受診が必要です。現行の細胞診の検査間隔は2年ですが、HPV検査の検査間隔は5年の対象者が増加すると予測され、受診行動の負担軽減が期待できます。利点がある一方、精密検査の受診率、検診結果のデータベース、陽性者の長期追跡の管理体制の構築等事前準備が前提であり、地域医師会や検査機関等の理解と協力が必要です。また、受診対象者への検診方法の普及啓発が大変重要です。

そこで、HPV検査の実施に向けて準備体制は整っているのか、また、検査の実施はいつ頃を目指しているのかについて市長に伺います。

HPV検査導入のための準備体制の構築と受診者に新たな不安を呼ばぬよう検査についてしっかりとした周知を行うことを要望します。

次に、ヘリカルCT検査と腹部超音波検査について伺います。現在の胸部エックス線による肺がん検診は1.5センチ程度以下の小さながんは見つけにくいという現実があります。ヘリカルCTは1センチ以下の小さながんや心臓の後ろに隠れる部位のがんも発見できる可能性が高く、肺がんの早期発見につながります。しかし、低線量CTによる検査もできるようになってきたとはいえ、被曝の問題から年齢的な制限の検討が必要です。また、腹部超音波検査は体への負担が少なく、超音波の体からの反射した情報を映像化し病気の有無を調べる検査で、肝臓、膵臓、腎臓などの臓器の検査を行うことができます。市民の方に検査方法についての情報をお伝えし、自らが判断し、必要と考える検査法を選択できるようにしていかなければいけないと考えます。

そこで、本市が実施する肺がん検診以外にも精度の高いヘリカルCT検査、腹部内の幾つかの臓器に異常を見つけられる腹部超音波検査などがんの早期診断に関わる情報をより多くの市民に周知すべきと考えますが、市長の見解を伺います。

がん検診に関わる情報を多くの市民の方々に知っていただくことが重要であり、検査法の実選択肢を持つことで、知っていれば早期に発見できたかもしれないとの思いをする方を少しでも減らすことができると思います。より効果的な情報発信を行うことに合わせて、幾つかの自治体で実施しているヘリカルCTを希望する方への40歳や50歳などの節目検診実施も検討していただくことを要望して、次の質問に移ります。

次に、5歳児健診について伺います。

私は、令和5年9月の決算総合審査において、発達障害の可能性のあるお子さんは小学校入学後に対人関係などの社会性に課題を有することが多く、不登校などの二次障害を起こす場合があるため、対人関係などの社会性が身につく5歳児に気づきのための健診を行い、就学までの1年間で小学校生活に対応できるように、そのお子さんに合った支援を行うことが重要との趣旨の質問を行い、5歳児健診の必要性について質問させていただきました。その

後、小学校入学前の支援として、国のこども未来戦略方針における具体的な施策の一つに乳幼児健診が推進され、このたび、こども家庭庁の母子保健医療対策総合支援事業の中で5歳児健診が初めて事業化されました。現在、横浜市の乳幼児健診は3歳児までのため、それ以降は保護者が子供の発達状況を確認する機会が少なく、小学校入学後に戸惑いを感じる生徒が一定程度あり、その背景は環境の変化だけではなく社会性の課題を抱えていることも考えられます。そのため保護者がお子さんの特性に気づききっかけとなり、サポートを受けられる体制をつくるために5歳児健診が必要であると考えます。

そこで、5歳児健診の意義についてどのようなお考えであるのか、市長に伺います。

本市では区福祉保健センターでの相談の希望者へ保健師や心理相談員などの支援、地域療育センターによる保育園や幼稚園の巡回訪問など様々な支援を行っていることは理解しております。また、約3万人弱の幼児を抱える本市で健診を実施するには事前の調整や準備が必要であり、医師の確保など様々な課題があることも承知しております。しかし、課題解決に取り組み、国が事業化をしようとしている今、本市も5歳児健診の実施を真剣に検討していくべきではないでしょうか。

そこで、5歳児健診の実施を検討すべきと考えますが、市長の見解を伺います。

私が5歳児健診の必要性を考えるようになったのは、15年ほど前にある保護者の方からお聞きしたお話が一つのきっかけでした。所構わず走り回るお子さんに走ってはいけないと何度注意しても理解しない。そのような繰り返し毎日続く子育ての中で疲れ果ててしまい、声を荒げ、歩きなさいと言ったらお子さんは走り回ることをやめたそうです。つまり、そのお子さんには、子育てにおいては誰でも使う言葉、何々してはいけないよという否定表現の理解が困難であるという特性があることに気づかれました。その気づきをきっかけに子供への伝え方を工夫し、コミュニケーションの取り方を確立することができたそうです。普通級で学び、友達もたくさんでき、友人と旅行を楽しんだりした学生時代を経て就職し、生き生きと仕事をしているとお聞きしました。もしあのとき子供の特性に気づかなければ、社会性が育たず、治療のために薬漬けになり、あの子の今の生活はなかっただろうという言葉が大変重く受け止めました。一つの気づきが人生を変えることができる場合があるからこそ、そこに支援の手を差し伸べていくために5歳児健診の実施を検討していただくことを強く要望し、私の質問を終わります。

ありがとうございました。（拍手）

○副議長（福島直子君） 山中市長。

〔市長 山中竹春君登壇〕

○市長（山中竹春君） 伊藤議員の御質問にお答えします。

防災対策の新たな取組について御質問をいただきました。

水循環式機器を各区に配備すべきとのことですが、避難所での水の確保は避難者の健康維

持のためにも必要となりますので、本市ではこれまでも水道管の耐震化や耐震給水栓の整備などにより対策を講じてまいりました。今後も引き続き計画的なインフラ耐震対策を進めるとともに、避難所の生活衛生環境の確保という観点からの必要な対策につきましても、他の自治体の取組を参考にしつつ検討を進めてまいります。

電気以外で動く車両の各区での保有についてですが、単一の燃料やエネルギーに依存しないことは災害時のリスク管理として大事な視点です。本市が導入を進めている次世代自動車は、水素を燃料とする燃料電池車や電気とガソリンを併用するプラグインハイブリッド車など電気以外で走行できる車両も対象としています。ゼロカーボンヨコハマと災害対応が両立できますよう今後の車両調達を進めてまいります。

上瀬谷地区に広域応援活動拠点機能を整備する意義ですが、大規模災害時は消防、警察、自衛隊などの市外からの応援部隊や支援物資を円滑に受け入れて迅速に市内に展開することが重要になります。津波の被害を受けない内陸地にあること、東名高速道路からの交通アクセスを有すること、こういった位置的に優位な場所にある上瀬谷に市域全域をカバーする広域的な拠点機能を整備することは本市の防災力の向上に大きく貢献するものと考えております。

平時から訓練などで活用すべきとのことですが、広域応援活動拠点としての機能を発揮させるためには、おっしゃるとおり実践的な場面を想定したオペレーションの確認を重ねていくことが重要であると考えております。警察、消防、自衛隊等の関係機関との連携を引き続き密に行いながら、現地での訓練など、いざというときに備えた対応を検討してまいります。

のげやまインクルーシブ構想について御質問いただきました。

のげやま子ども図書館整備に当たっての意気込みですが、中央図書館の1階を居心地のよい子ども図書館としてリニューアルいたします。乳幼児が寝転び、遊び、絵本を読むことができる親子フロアや楽しく学ぶことができる子どもフロアを整備します。お子さんたちが何度でも来たくなり、また乳幼児を連れてきてもゆっくり安心して楽しむことができる野毛山の中の憩いの場として整備を進めてまいります。

がん検診について御質問をいただきました。

子宮頸がん検診へのHPV検査導入に向けた準備状況及び開始時期についてですが、HPV検査の導入に当たりましては、受診結果の管理や検査結果に応じた受診勧奨の仕組みを構築して市民の皆様へ周知をすることが重要になります。また、検査方法の変更につきましても、既に実施医療機関との調整を開始しております。開始時期につきましても、受診結果の管理などの仕組みを構築した上で全国的にもいち早く可能な限り早期に開始をしたいと考えております。

がん検診以外にもヘリカルCTなどがんの早期診断に係る情報を市民に周知すべきとのこ

とですが、本市として、まず子宮頸がん検診へのHPV検査単独法の導入、そして胃がん検診の自己負担額の軽減などを進め、現行のがん検診の受診率の向上に取り組んでいきます。さらに、市民病院やみなと赤十字病院ではヘリカルCT、腹部超音波による検診等を取り入れておりますので、希望される市民の皆様が受診ができるようウェブサイトなどを通じた情報発信を強化してまいります。

5歳児健診の意義について御質問をいただきました。

5歳児健診の意義についてですが、国においては、5歳児健診は3歳児健診などで確認する心身の成長発達に加え、特に社会性や言葉の発達状況などの確認を行うこととされています。保護者にとりましては子供の成長に伴って変化する子育ての悩みや不安を相談する機会となり、子供自身の健やかな成長にもつながると考えます。

5歳児健診の実施に向けて検討すべきとのことですが、5歳児健診の実施には健診方法や健診後の支援体制の構築など課題がございます。今後、国から示される詳細な実施方法などの情報収集に努めてまいります。

以上、伊藤議員の御質問に御答弁を申し上げます。

残りの御質問につきましては教育長より答弁をいたします。

○副議長（福島直子君）鯉淵教育長。

〔教育長 鯉淵信也君登壇〕

○教育長（鯉淵信也君）のげやまインクルーシブ構想について御質問いただきました。

のげやま子ども図書館整備の課題への対応ですが、中央図書館は令和6年に築30年を迎え、施設に改修すべきところもあります。障害のある方、子育て世代の皆様から御意見を伺い、施設の内外でバリアフリー向上を検討していきたいと考えています。また、中央図書館1階を現在利用している方が引き続き利用できるよう、フロア配置の見直しや工事中の図書館サービスの継続についても考えていきます。

以上、御答弁申し上げます。